一般社団法人　全国医療通訳者協会

ＮＡＭＩニュースレター

第１３号　　２０２２年１０月発行

全国医療通訳者協会（National Association for Medical Interpreters）は
医療通訳者が医療通訳者のために設立した職能団体です。

2022

２．順天堂大学大学院医学研究科医科学専攻修士課程医療通訳分野（2021 年 4 月開講）

〇概要

医療機関の外国人患者の受け入れ態勢の整備、特に深い知識を持つコミュニケーションの仲介者としての訓練を受けた医療通訳者の必要性は、ますます高まっている。ヘルスコミュニケーション学位プログラムでは、厚生労働省の医療通訳養成カリキュラムに基づく認定医療通訳者養成講座を修め、医療通訳に必要な専門的知識、技法を体得し、医療通訳を必要としている患者や家族に適切な支援を提供して、医療者と患者間のコミュニケーションを支援する医療通訳に重要な役割を果たす人材を養成する。対象言語は英語、中国語。

順天堂大学プレスリリース（2020 年 11 月 4 日）
https://www.juntendo.ac.jp/news/20201104-03.html
第２回ヘルスコミュニケーション学記念セミナー（2021 年 5 月 15 日）
https://www.umin.ac.jp/hc/seminar2021/seminar2021.html
公衆衛生学コースヘルスコミュニケーション学位プログラム
https://med.juntendo.ac.jp/education/master/course_info/pg_hlc.html

〇担当教員の大野直子准教授と修士２年生の鈴田佐和子さん、田中奈美さん（いずれも中国語専攻）へのインタビュー（以下敬称略）

―医療通訳のコースが開講して今年で２年目ですね。院生の人数と内訳を教えてください。

大野：２年生は英語４名、中国語４名。１年生は英語５名、中国語６名。年代は 20 代から 60 代まで。女性が多いです。ほとんどが社会人、外部大学出身者。中国語は医療通訳経験者、中国語母語話者が多いです。英語は医療通訳経験者は少ないですが、語学力は高いです。

―順天堂医院国際診療部での病院実習では、コロナの影響はありましたか。

大野：今年は院内に入る条件が厳しく、受け入れ方針もなかなか定まらず思うようにできませんでしたが、代わりに系列病院や医師の入院患者への回診などの見学ができました。

鈴田：通常医療通訳が入る時の医師の言葉は、例えて言うと氷山の上層部分で、そこに至るまでにさまざまな段階を経ているということが回診の見学で垣間見ることができました。通訳者も氷山の下層部分を把握していると、自信をもって通訳ができると思います。

―本コース修了者は日本医療教育財団の医療通訳技能検定試験基礎・専門試験の受験資格を得られるとのことですが、２年生の皆さんは全員受験されますか。

大野：２人とも既に検定試験の「専門」に合格しています。

田中：試験の時期が大学院のいろいろな授業のレポートや演習の準備と重なって大変でしたが、試験勉強に通じることもありました。

―検定試験は受けずに医療通訳者以外の道、例えば研究者を目指す院生もいますか。

大野：はい、少数ですがいます。

―2023 年度から取得学位が変更になるそうですね。
大野：はい。修士号が「医科学」から「公衆衛生学」になり、それにともないカリキュラムが多少変更します。健康行動科学、疫学、統計学などが１年次に学べるようになります。医療者で国際的にキャリアを築いていきたい人には魅力的だと思います。
田中：修士論文（医科学特別研究）では統計の知識が必要になるので、統計の授業は１年次に必修で学んだ方がいいと思います。私は学外の統計教室などで勉強しました。
鈴田：私たちは手探りでネットで調べて情報交換していました。

―本コースを選んだ動機を教えてください。
鈴田：私は通訳学校の医療通訳コースで教えていて、通訳活動もしています。2015 年頃からインバウンド(註：日本で医療を受けるために来日する外国人患者)の仕事が増加しました。ある時、中国人医師が患者として来日され、セカンドオピニオンを求めて受診された時の通訳を担当しました。日本人医師は、相手が医師だと分かると患者というより医師としてハイレベルな話をされたので、上手に通訳できず、もっと勉強が必要だと感じました。2020 年からコロナの影響で中国からの来日客が減り、時間に余裕できた時に本コースの話を聞き、受験を思い立ちました。
田中：私は北京で 10 年間出版関連の仕事をしていました。帰国後も同じ仕事を続けていますが、もう少し個人の問題解決につながるような活動もできないかと思っていました。そこで医療通訳という仕事があることを知り、自分自身も病気を経験したので興味を持ちました。鈴田さんの教えている通訳学校で学んでいましたが、もう少し勉強したいと思いました。

―大学院生活はどんな感じですか。
鈴田：１年次は週３～４日、夜間（18:00～21:15）の授業を履修していました。授業後課題レポートを書くのですが、生化学や医科学研究方法論は先生のお話がなかなか理解できなくて大変でした。しかし、ほとんどの医学系の授業がオンデマンドで録画を繰り返し見てレポートを書くことができるのはありがたかったです。病気や検査について表層的なことは理解していましたが、背景や機序まで学べたので、自信を持って通訳現場に戻れると思います。
田中：大学院にはいろいろなバックグラウンドの方が集まっているので、先生方はできるだけ平易な表現でお話をしてくださるのですが、それでも専門性の高い内容は難しく、文系の私はついていくのに必死でした。
鈴田：医療系の授業が終わったあと、先生のところへ質問しにいくのはたいてい医療通訳のわれわれ８名で、くらいついていましたね。

―順天堂大学ならではの良さはどんなところですか。
田中：本コースのカリキュラムにはないのですが、医科学コースの解剖見学の授業をどうしても聴講したくて、担当の先生にお願いして参加させていただいています。実際のご遺体を前にして、体の組織などの説明を受けると、解剖の本や手術動画などでは十分理解できなかったことが目で見て学べると感じました。医療知識を高めることができ、今後の通訳にも活かせるため、順天堂大学を受験してよかったと思いました。
大野：単位とは関係ないですが、がんの公開講座など無料で参加可能なため、最先端のことが学べます。

田中： NAMI 会員の方の多くがそうであるように、医療通訳現場の課題や問題点を知る通訳者が大学院で学術的な研究手法を学び、修論という形で研究に触れる機会を持つということは、通訳者にとって有意義なだけでなく、医療通訳の研究の向上という面でも意味のあることではないかと思います。
鈴田：医療系のバックグラウンドがあって語学力をつけたい人には通訳学校がぴったりだと思いますが、語学系の人が医療の専門性を高めるには順天堂大学のようなところが合っていると思います。
田中：順天堂大学は学費が比較的安く、内容も充実しているので、勉強は大変ですが、その価値は高いと思います。プロ通訳者でも学べることは多いのではないでしょうか。

―修士論文（医科学特別研究）ではどんな研究をされていますか。
鈴田：医療通訳者の教育訓練内容と、仕事継続意識や満足度との関連を調べています。若い人が医療通訳を勉強して職業として成り立つ根拠に寄与できるような論文になればと思います。
田中：日本の医療機関を受診したことのある外国人の方を対象に、受診時の会話理解や診察の満足度などを調査し、医療通訳の必要性を調べています。

―修了後はどのような計画がありますか。
鈴田：修士課程で学んだことを、通訳学校での授業でフィードバックできればと思っています。また通訳者として医療系の商談や会議にもチャレンジしていきたいです。
田中：通訳の現場を体験しつつ、研究も続けていければと考えています。

病院実習の様子

3．2022 年度 CHIP 研修

9 月 18、19 日に CHIP 研修第 3 回が終了し、あと 2 回を残すのみとなりました。
受講生の皆さんは事前準備も怠りなく、本当に一生懸命取り組んでいらっしゃいます。毎回そんな姿を見てこちらも新たな気付きを頂き、また励まされてもいます。2020 年度から本研修は遠隔で行っていますが、実際の現場では遠隔と対面の通訳形態があり、それぞれの特徴を聞くことができて大変興味深いです。

本研修の特徴は、充実した講義と通訳練習（ロールプレイ）です。前半は、各分野の医療者による講義で、これだけ専門家を集められる研修は他ではあまりないと自負しております。90 分の短い講義で